

# 明治高等学校中学校における英語多読-生徒の洋書選 択についての考察-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学附属明治高等学校・中学校 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江竜, 珠緒, 村松, 教子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/17241">http://hdl.handle.net/10291/17241</a>

# 明治高等学校中学校における英語多読

## 生徒の洋書選択についての考察

江竜珠緒／村松教子

### はじめに

学校図書館が教科を支援する形態には、蔵書構築、ブックリスト、パスファインダー作成等による支援、T.T.あるいはT.A.としての授業支援などさまざまなものがある。中でも資料提供(授業にふさわしい蔵書構築)による教科支援は学校図書館の基本である。近年では国際化、グローバル化の流れを受け、和書のみでの支援から、洋書の蔵書構築、英語科への資料提供支援も増えてきた。『学校図書館』2012年5月号(No.739)では「外国語活動と学校図書館」が特集として生まれ、英語教育に対応した資料の収集、英語絵本の読み聞かせ、英語多読、多聴の実践についての報告がなされている。

「英語多読」(「多読」と省略されることも多い)とは、文字どおり、英語の本を多く読むことで、英語力を向上させる試みである。SSS(Start with Simple Stories)英語学習法研究会<sup>1)</sup>が推奨する「辞書は引かない」「わからないところはとばす」「つまらなければやめる」の三原則がよく知られている。現在では、主にイギリスの語学専門出版社が出版している英語学習者用の段階別よみもの Graded Readers(以下 GR)や、英米の子どもたち本の読み方を学ぶために使われるレベル分けされた絵本シリーズ Leveled Readers(以下 LR)を利用した英語多読の実践が中学校から大学まで数多く報告されている。

本校の英語科が英語多読を開始したのは2006年、図書館が本格的に英語科との連携を開始したのは2009年からである。当初は400冊程度だった学校図書館所蔵の洋書が2010年4月には2,500冊に増え、90%以上の生徒が学校図書館を利用して洋書を読むようになった。

現在、英語多読は中学1年生の3学期以降、高校3年生までが実施しており、学校図書館には約5,100冊の多読用洋書が所蔵されている。高校1、2年生のうち半数以上の内部進学生は、中学1年生から学校図書館に洋書があることを目にし、英語で読書することが当然だと感じて育ってきた生徒たちである。彼らの興味、関心に応じた洋書を揃えていくことが、今後、英語科と学校図書館に課せられた大きな責務といってもよい。

そこで英語科と図書館が共同して、生徒の読書ニーズにあった図書を選択、効果的な読書推進方法の考察のために質問紙調査を実施した。調査の目的は、生徒たちがどのような要因を重視して図書を選択するのか、その行動と要因を明らかにし、今後の洋書選書に活用することで

ある。本稿では、その一部について考察を深め、報告する。

本稿は5章からなる。第1章で本校の英語多読の実施状況について紹介する。第2章では日本と海外の先行研究について述べ、第3章では日本における多読用洋書の資料収集の問題点について述べる。第4章では生徒は何を基準にして洋書を選んでいるのか、実施したアンケート調査を分析する。第5章ではそれまでの検討をもとに、多読用洋書の選書について今後の課題と展望を述べる。

## 1. 本校の英語多読

第1章では、本校の英語多読について、実施の経緯、本校図書館との連携、実施上の課題について述べる。

### 1.1 英語科における実施の経緯

現在、本校図書館には和書約5万冊、洋書約5,100冊が所蔵されている。

本校の英語多読の実施開始は、2006年3学期のことである。2006年に他校で英語多読の経験のある英語科教諭が着任し、英語多読のための洋書収集が計画された。それまでも一部の教員は長期休みなどに読書課題を出していたが、簡単な英語をたくさん読むことで英語力を身につけるという「英語多読」を意識して実施された洋書の読書は、このとき中学1年生を対象に授業内に実施されたものが最初である。しかし、その後は校舎移転などもあり、継続的な英語多読実施とはならなかった。

2008年に英語科の所蔵している洋書は2,500冊程度になった。これは2006年から2008年にかけて、複数の英語科教諭の研究費から購入されたものである。冊数が揃ったところで、教科内にも多読チームが発足した。このとき、書誌情報等はエクセルで管理していたが、将来を見据えて図書館と相談し、データ化に必要な項目、レベルや語数の貼付方法などを決定した<sup>2)</sup>。しかし、英語多読については馴染みのない教員も多いこと、配架場所が研究室内で生徒が自由に手にすることができないことなどから、多読チームの教員が自分の担当している学年で実施することしかできなかった。2008年は共学化した2学年（中学1年生と高校1年生）での実施のみであった。

中学1年生は自分で本を選べるレベルには達していないため、担当教員が1学期に *The Three Billy Goat Gruff* (Oxford Classic Tales) の big book を用い、授業で shared reading<sup>3)</sup> を行った。またその後 *Chicken Run* (Penguin Young Reader) をはじめとした2～4冊を選定し、全員に同じ本を持たせた。これはブックスタート<sup>4)</sup>のような感覚で、全員に数冊の洋書を持たせることで、今後の読書習慣をつけるのが目的だった。加えて、この中学1年生には夏休みに少しだけ

チャレンジを要する本を選び、音声は教員自ら録音をして全員に CD で配布した。使用したのは *Let's Go To The Rainforest* (Oxford) であった。

高校 1 年生は 1 学期から授業を通じて、ブックトラックで教室に運んだ本を貸し出すなどの方法で英語多読をスタートした。授業のたびに教員が自分の読んだ洋書を紹介し、貸出を推奨したため、一部の生徒にはすぐに定着した。

2009 年には約 1,600 冊を図書館システムにインポートし、高校 1、2 年生の 2 学年で実施を開始することができた。中学 2 年生と合わせると 3 学年が動き出したことになる。ただし、通年で英語多読を実施していたのは高校 2 年生だけであった。このとき、洋書が図書館内に配架されたことで、中学 2 年生から高校 3 年生までの 5 学年が長期休み前に英語多読を実践するようになった。しかし、同時に複数学年が課題を出すと、必要数が不足するという事態も生じた。このときのレベル別冊数を振り返ると、Starter : 702 冊、Level1 : 518 冊、Level2 : 168 冊、Level3 : 134 冊、Level4 : 109 冊、これに図書館が所蔵していた Oxford Bookworms など 400 冊のみであり、特に Level1、2 の不足が目立った。

2011 年には教員に英語多読指導の経験が増え、生徒にふさわしいレベルの把握なども進んだため、Level 1、2 の洋書を大幅に収書することになった。2009 年には 518 冊だった Level1 はこのとき 1,294 冊に、168 冊だった Level2 は 862 冊へと増加した。また、Starter は 1,298 冊、Level3 は 578 冊、Level4 は 516 冊に増えた。このことで、単純計算すれば、少なくとも 5 学年全員 (約 1,100 名) が 4 冊を借りられる状態になった。しかし、それでも生徒が満足のいく量ではなく、高校生を中心に「自分が探しているレベルから自由に選ぶ洋書がない」という不足感、不満感が生じた。この理由については、1.3 でもう少し詳しく述べる。

2012 年現在、英語多読は中学 1 年生の 3 学期以降、高校 3 年生までが実施している。課題の出し方は学年を担当している英語科教諭にまかされているため、語数やジャンル、ブックレポート<sup>5)</sup> の出し方などは統一されていないが、1 年を通して常に英語多読をさせることだけは決まっており、またブックレポートは中学 1 年生から高校 3 年生まで原則的に同じものを使用する。

夏休み課題提示前には、各学年でどのレベルを何語課題とするか情報を共有し、すべての生徒が 1 冊から 3 冊の洋書を持てるように配慮した。例えば高校 1 年生は Level 1 のみ、高校 2 年生は Level 2 以上、高校 3 年生は Level 3 か 4 という具合である。そのため、洋書が不足する事態は避けられることとなった。

ブックレポートは、当初、B5 サイズ 1 枚につき洋書 1 冊とし、タイトル、著者名、出版社名、あらすじ、読後コメントを書かせる形式だった。しかし、洋書を読むのに費やす時間よりもレポートを書く時間のほうが長く負担が大きいという感想が多かったため、現在はあらすじの欄

をなくし、コメントも数行書けばよいものに改訂した。ブックレポートの形式はその後もう少しずつ改良を加えており、2012年は作者と出版社の欄をなくし、貸出の際に利用するバーコードの番号を書くようなものとした。これによって、教員側がOPACを利用して、具体的にどの洋書かということを確認できるようになった。ブックレポートは授業を通じて配布される以外に、図書館でも自由に入手できる。また、廊下の掲示板に袋を提げたり、教員室前のテーブルにも置くなどして、多くの場所で入手できるようにしている。

## 1.2 図書館との連携

はじめに述べたように、英語多読そのものは2006年から実施されていたが、図書館が英語科との連携を開始したのは2009年からである。それまでも図書館にはOxford Bookworms、Penguin Readersなどが400冊程度、英訳された日本の漫画が数冊入っていたが、漫画以外の洋書を借りに来る生徒はほぼ皆無であり、配架場所も図書館の目立たない位置にあった。また、図書館も英語科がどのような動きをしているかをまったく把握していなかった。

図書館と英語科が連携するきっかけには、2007年から専任司書教諭が配置されたこと、2008年に新しく調布校舎へと移転したこと、教科支援の方法を模索していた司書教諭と、英語力強化のために本格的な英語多読の実施を検討していた英語科が話合う機会が持てたこと、などがあつたと考えられる。

配架に関しては、英語科と司書教諭とでデータ入力、配架場所等の検討を重ねた結果、英語科が持っているエクセルの書誌情報を図書館システムにインポートして蔵書データとし、図書館内のブックトラックを当初の配架場所とすることが決定した。このとき図書館から英語科に伝えたシステム利用のメリットは、蔵書管理の容易さと統計処理の簡便さである。洋書に関しては図書館ではなく英語科管理という扱いにし、関連データはすべて提供することにして、クラス別利用状況、貸出冊数などの統計データを英語科教諭が容易に入手することができる。また、ブックトラックに配架することは、教室と図書館の複数クラス同時展開を可能とした。

加えて、これを機に英語科教員によるレベル分けと語数カウントも実施された。レベルと語数は色付きテープ（テプラテープ）で洋書上部に貼付され、これによって、レベル別配架を行うことができるようになり、生徒が課題にあった図書を選びやすくなった。なお、現在では冊数が増加したため、Level2以上の洋書は書架に配架されている。

学校図書館と英語科が連携して英語多読を推進することは、学校図書館側にもメリットがあると感じている。教室とは違う場所で、いつでも自由に洋書にふれ、ゆっくりと読みたい洋書を選ぶことができるということもあり、図書館に足を運ぶ生徒が増加した。休み時間や放課後、

書架を眺める生徒が増えたために、つねに活気あふれる図書館となっている。

### 1.3 実施上の課題

実施上の課題はいくつかある。

ひとつは、1.1でも述べたように蔵書数の問題である。

本校には2012年現在、中学生502名、高校生791名、計1,293名が在籍している。うち、中学2年生以上は1,127名である。先に述べたように、2011年の段階でも単純計算で1人4冊以上を借りることができたはずだが、それでも不足感が生じたのは、課題内容とレベル、語数との関係であると思われる。

例えば、英語多読開始から2年経った2009年、中学1年生時に多読を実施した中学2年生が通年での実施にいたらなかったのは、中学生が読むような易しい洋書がOxford Reading Tree (ORT)を中心とした一部のシリーズに限られ、その絶対数が不足していたためである。また、Level1は中学3年生から高校2年生までが必要とするが、先に述べたように2009年には518冊しかなかった。2011年にLevel1は1,294冊となり、冊数は十分なものとなったが、不足感、不満足感は継続した。

2012年現在は1,378冊が所蔵され、「自分が探しているレベルから自由に選ぶ洋書がない」という不足感は和らいでいる。冊数としては2011年度と100冊程度しか変わらないが、不足感、不満足感が減少したのは、生徒の意識の変化と、課題提示の方法が変化したためであると思われる。レベルを問わず、冊数あるいは語数だけを指定すると、中3以上の生徒の選択はLevel1に集中する。実際にはStarterやLevel2の一部にもLevel1とそう変わらない難易度のものがあるのだが、生徒の感覚の中には「Level1が自分にはちょうど良い」という思い込みがあったからである。現在では、英語多読の継続によって高校生のLevel2に対する抵抗感が薄くなったこと、また、英語科教員が生徒の学習状況などをみて高校2年生以上にはLevel2、3以上を読むよう積極的に勧めていることなどもあり、かつての不満はかなり減少しているように感じられる。ただし、現状でも「どれが自分に合うのかわからないから、試しに多めに借りる」生徒が複数存在するため、図書館利用が遅れた生徒が読みたい本を自由に選べなかったと感じてしまったことは事実である。冊数を増やすか、自分に合わないと思った洋書はなるべく早く返却するなどの指導をすることも必要となってくると思われる。

課題の二つ目は、担当教員の英語多読に対する積極性である。例えば2009年には高校生が読むOxford Bookworms、Penguin Readersはそれぞれ同じタイトルが複数冊ずつあったこともあり、高校2年生では順調に多読活動が続けられていた。しかし、同じような量・質の活動が高校1年生には見られなかった。多読開始から3年が経つ現在でも、例えば高校1、2年生にお

いては1学期中に洋書を借りた生徒が95%存在するのに対し、高校3年生では半数以下の48%しか借りていないということがある。担当教員が日常的に英語多読を勧めるか、ブックレポートなどの課題を出すか否かということが、生徒の継続的な多読の実行に関連している。学校全体での英語多読推進には、英語科教諭全体の意識の共有が必要となってくる。

3つ目に、ブックトラックを用いて教室で英語多読を実施した場合、授業内に読んだ洋書を貸出手続きを取らずにそのまま持って行ってしまう生徒が複数おり、対応に悩まされたということがある。和書と比較してかなり薄いため、ついうっかりファイルやバインダーに挟んだまま持って行ってしまう生徒もいる。

最後に、又貸しの問題である。自分が読んでおもしろかった本を手軽に友人に渡してしまう生徒が和書よりも多いように感じられる。そして、先に述べたように薄い洋書は紛失しやすく、誰に貸したのかわからないまま弁償しなければならない生徒も増えつつある。これらは図書館利用モラルにも関連するため、図書館と協力しての指導が必要となってくる。

その他、現時点では問題となっていないが、配架場所については大きな課題となってくることが予測される。現在、両面ブックトラック2台、片面ブックトラック1台、書架17段、そのほかに雑誌架上、低書架上などが洋書の配架場所となっている。しかしさらに洋書が増加した場合には、あらたな配架場所を検討する必要があることは間違いない。限られたスペースの中で、和書と洋書をいかに生徒の利用しやすいように配架するか、今後の大きな課題である。

## 2. 先行研究

生徒はどのようにして自分が読みたい本を手にするのであろうか。

課題となれば、同じ本を繰り返し読むのではなく、新しい本を読む必要性が生じる。そのため、書架の前でどの洋書を読むべきか悩む生徒の増加も当然のことである。図書館にも「Level1くらいでおもしろそうな本」「読みやすそうなノンフィクション」といった読書相談が増えてきている。休み時間、放課後には多読用洋書を選ぶために書架の前で迷う生徒も多い。

第2章では、図書館の選択行動に関する先行研究をいくつか紹介する。

### 2.1 日本における先行研究

和書に関しては、桑田てるみ氏が「読書材」（調べる本とは区別した「読書のための資料」）を生徒がどのように選択するのか、その要因と行動について明確にするための調査を実施している<sup>6)</sup>。この中で桑田氏は、「選択要因として重要視される項目の全体的な傾向は、『内容の好み』『本の外見』『本の評判』」であるとし、特に読書量の多い生徒ほど「『本の評判』」の情報をもと

に読書材を選択する傾向」にあり、読書量の少ない生徒は「『読みやすさ』を気にすることが多いなど、読書量による選択要因の差が確認できた」としている。そしてここから、読書量の多い生徒は「自分が好きな著者やシリーズ」を自身で把握していること、読書量が少ない生徒は「ベストセラーや映画になった『話題の本』など、一般的な読書の情報をもとに読書材を選択しようとする傾向がある」と推測している。一方、教員や授業内での紹介など「他者からの推薦」を重視して選択する生徒が少ないことも述べられている。

多読用洋書に関しては、桑田氏の研究のように、選択行動だけをまとめたものはない。ただし、英語多読に関する実践報告の中に、生徒の洋書選択の行動について書かれたものがいくつかある。

中学生を対象とした多読指導実践の中で、佐藤大介、橋内幸子氏は、最初に図書館に所蔵されていた83冊（A Little Golden Book、南雲堂レディバード・リーダーズなど）に加えて、Oxford Graded Readers、Classic Tales Beginner<sup>1</sup>、2などを購入し、230冊を用意したと述べている<sup>7)</sup>。そして、それらの中では「生徒が読んだほとんどがOxford Graded Readersシリーズであった。特に生徒が手に取り読んだのは、Oxford Bookworms Starterであった」とし、「既習の文法事項で構成されており」「マンガ感覚で楽しみながら読めるComic Strip形式のものや、物語の展開を自分で選択肢を選びながら進めていくゲーム感覚のInteractive形式のものが生徒には特に人気」であったと紹介している。さらに、両氏はこれらの洋書は生徒の選択によるものではなかったということから、生徒自身にもAmazonやパンフレットの中から選書をさせている。生徒が選択した洋書は映画原作15冊を含む33冊であり、両氏はそこから「多くの生徒が映画の原作本やすでに話の展開を知っている本をもっと多く用意すべきだと感じ」たことを述べている。

山本昭夫氏は高校生を対象とした多読実践の中で、生徒が洋書を選ぶことに困難をきたす理由を5つ挙げている<sup>8)</sup>。①自分で洋書を選んだ経験の少なさ、②十分な‘reading stamina’のなさ、③学習者の先入観、④学習者のプライド、⑤時間不足、である。特に、生徒が好きなトピックスの本と英語の難易度が合致しないために難しすぎる洋書を選んでしまって読めない生徒が出てくるとか、単語量が多く新しい単語の含まれたテキストを読むことが英語の本を読むことだと信じていたり、すでに高い英語力を身につけているため簡単な本を読む必要がないとする学習者の存在についての指摘は注目できる。山本氏は、生徒の好きなトピックスと洋書難易度の合致のために、異なったレベル、シリーズ、出版社の本を十分に所蔵することの必要性についても述べている。

釣井千恵、ハーバート久代、山科美和子氏による私立大学における英語多読成功者へ質的調査研究では、面接調査の中で学生が本の選択方法について答えている<sup>9)</sup>。それによれば、学生



は「出版社の違いを把握」しており、「レベルの違い把握と自己調整」、「クラスメートとの情報交換」の活用によって、本を選択しているという。多読用洋書に関しては、「本の評判」などはあまり重視されず、「好きな著者」よりも「出版社」が重視されているようである。

## 2.2 海外における先行研究

Maynard; Mackay; Smyth が 2007 年にネットを活用して 4,182 人のイギリス人の子どもたちに質問紙形式で調査をしている<sup>10)</sup>。対象を 3 つのグループ（幼児、小学生、中高生）に分け、どのような基準で本を選んでいるかということについて分析している。年齢が上がるにつれて、書店での購入よりも図書館で借りることが増える、書評や他者の推薦よりも自分の選択基準で本を選んでいるといった結果が得られている。また、年齢が上がるにつれて男女間の選択基準が大きく分かれる結果がみられた。The girls are significantly more likely to choose books on the basis of the 'blurb' and because they know the name of the writer, whereas the boys are significantly more likely to choose books because they have seen a film version. と報告している。'blurb' とは、本文とは別に掲載されているあらすじや宣伝文、推薦文などであり、和書でいう帯情報のようなものである。シリーズを好んで読む生徒は、knowing what to expect in the story and enjoying reading about the same character(s) であると述べられている。

Dali は 2012 年にカナダに移民してきたロシア人がどのように図書を選択をしているのか報告している<sup>11)</sup>。インタビュー形式で調査しており、図書の選択基準は上位から the genre, the author's reputation, the reader's personal situation, and the language of a book とある。また specialist/librarian advice, the predictability of reading outcome, and catchy book covers も大いに関係があると報告している。一方、the advice of friends, was not accorded much importance ともあり、年齢や人種に関わらず、友人からの推薦は選択基準の大きな要因にならないことがわかる。後半には第二言語の書物を選ぶ際に易しいものを選ぶより辞書を引きながら読むようなレベルを好んで選ぶ被験者もあり、学習者が必ずしも「易しいものをたくさん読むから始める」ことに満足感がないことが報告されている。しかし、彼らはその労力から読むことを面倒に思うことにもふれられている。

その他、本の種類による効果を報告しているものがある。P-H Sheu は台湾の中学 2 年生の子どもを対象に GR、books for native English speaking children (BNESC)、文法の教授やワークを行う 'controlled group' の 3 つに分けてその効果を調べている<sup>12)</sup>。その結果、語彙力や文法力は GR で伸びが見られ、BNESC や controlled group では効果が見られなかったことを報告している。内容理解に関してはどのグループにも目立った差は見られなかった。

### 3. 英語多読における資料収集

第3章では、生徒の洋書選択について述べる前に、多読用洋書の選書と購入の難しさについて述べる。

#### 3.1 本校における洋書選書

英語多読開始当初、本校においてはまずは冊数を揃えることが優先され、出版社や書店がなんらかの選択基準でまとめ、日本においても比較的入手しやすくした多読用洋書セットや、GR、LR に依存することが多かった。出版社でいえば、Penguin Readers、Oxford Bookworms、Macmillan Readers、ORT、Harper Collins の I can Read! シリーズなどである。また、比較的入手しやすい絵本や児童書、Clifford、Curious George、Nate the Great などのシリーズも揃えた。

しかし、英語科教諭に選書経験がほとんどなかったため、ひととおりシリーズものを購入した後は、何をどのように購入すればよいのか戸惑うこととなった。多読チームのリーダーを務めた英語科教諭は、海外で育った経験と前任校での英語多読指導の経験を活かして選書を始めたが、入手できるものには限界があった。そこで SSS 英語学習法研究会が提供する洋書セット<sup>13)</sup>から購入をした。ここで困難を感じたのは、リストにはタイトルしか書かれておらず、実際の洋書を見ることができなかつたため、選定した洋書が本校の生徒の興味を引くものなのか、レベルや語数が適当なのかということがわからなかつたことである。導入当初は教員も生徒もどのような本から読み始めるとよいかわからずにいた。導入初期に人気があつたものは、生徒が小学生のときに日本語で読んだことのあるもの、映画の原作本、Curious George のように一般的によく知られてゐたシリーズが中心であつた。

2008 年から英語多読が本格的に始まつたため、生徒の要望を少しずつ集めることができた。このとき挙げられたものは、高校生は Oxford Bookworms Level 1 くらいのものでイラストがやや少なめなもの、Chicken Soup for the Soul のような短編集、Elmer and the Dragon のようにある程度の語数があつても和書で読んだことのある洋書といったものである。高校生からは、イラストや挿絵が中心の絵本には物足りなさを感じることに、電車の中でそういった洋書を開くことに抵抗があるという意見があつた。そのため、英語多読が定着しだすと、Christmas Carol や Love Story (いずれも Oxford Bookworms) のような Classic だけではなく、伝記やノンフィクションのリクエストが出てきた。これには、英語が苦手な生徒の場合、物語では英文を理解しないと話の展開がわからないが、ノンフィクションであれば、もともとの知識や写真・イラストを頼りにある程度内容が理解できるという理由があつたようである。

### 3.2 洋書選書における問題点

生徒の成長に合わせて、その学習環境や読書ニーズに対応した適切な資料を揃える必要性は、和書も洋書も同様である。和書に関しては、ある一定の基準として、1980年に制定され1988年、2008年に改訂された「全国学校図書館協議会図書選定基準」(全国学校図書館協議会)<sup>14)</sup>がある。しかし、母語以外の言語として英語を学ぶ中高生にどのような図書を選定するべきかという基準はない。ただし、文部科学省の『中学校学習指導要領解説 外国語編』<sup>15)</sup>では、授業で使用する英語教材選択の観点として、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする」「英語を使用している人々だけでなく、他の言語を使用する人々に関しても理解を深めるとともに、日本人に対しても理解を深めることをねらいとするような題材などから適切に選択」する必要性が述べられている。

しかし、英語多読に関しては、授業の一環で行うものとはいえ、平易な文章を多く読ませることを主眼としているため、書店で入手しやすい「物語」以外、例えば「日常生活、風俗習慣」「地理、歴史」「伝統文化」「自然科学」などの洋書については、英語教科書の副教材として販売されているテキストでは難易度が高すぎるという問題がある。図書の購入方法には、書店で直接手にして選書、購入する方法と、選書のためのなんらかのツール(和書であれば全国学校図書館協議会『学校図書館速報版』など)を利用しての購入があるが、洋書に関しては、適切なツールがないことに加えて、書店においてもその絶対数が少ないためである。海外の学校図書館において地理や自然科学の図書がないことは考えられず、また、生徒の興味・関心は必ずしも「物語」にばかりあるわけではないのだが、それらを手にするためには煩瑣な手続きが必要なため、短時間である程度の冊数をそろえようとする、非常に偏った蔵書にならざるを得ない。出版社や取次のパンフレットに掲載された洋書にも「自然科学」や「自伝」「ノンフィクション」といったものがないわけではないが、難易度が低く語数の少ないもの、あるいは難易度が高く語数も多いもの、といった極端なものが多いという問題点がある。フィクションであっても Oxford Bookworms Level 3、4の難易度と語数で、ヤングアダルト(以下YA)に分類される洋書を探し、購入することは容易ではない。

これはおそらく他校も同じ状況であると思われる。『学校図書館』の特集でも、仙台白百合学園中・高等学校に人気の洋書として、ORT、I can Read!、Penguin Readersなどが挙げられている<sup>16)</sup>。実際にはGR、LR以外の洋書も購入しているのかもしれないが、限られた洋書名しか見ることができない。また、都立大田桜台高校の司書米澤氏は「多読図書は、内容でいえば文学や映画のリトールド、ノンフィクション、自伝、生物や天体、地理、歴史に関する学習内容を含むものなど幅広いジャンルにわたっている」<sup>17)</sup>と述べているが、ORT、GRのほか、読み

もの以外の洋書に関しては具体的なシリーズ名や出版社名が挙げられていないため、ノンフィクションや生物、天体、地理などに関して、実際にどのような洋書を選択しているのかは不明である。

このように、他校ではどのように「物語」以外の選書を実施しているのか、情報の共有がなかなかされにくい点にも、洋書選択が難しい理由がある。本校では東京学芸大学附属国際中等教育学校と、選書ツールとしての海外サイトを相互紹介しあったことがあるが、このような機会が増えることが望ましい。

なお、図書館から英語科に洋書購入における参考にと紹介したのは、YALSA (Young Adult Library Services Association)<sup>18)</sup>、Teachers first<sup>19)</sup>、Barnes & Noble<sup>20)</sup>、Los Angeles Public Library Teen Web<sup>7</sup>など、図書館や書店などによって推薦された YA 図書がリスト化されたサイトである。

#### 4. 本校生徒の洋書選択行動

本校生徒は「月に 5,000 語以上」あるいは「夏休み中に Level1 以上、1 万語以上」などといった課題に対応するため、図書館に足を運ぶことになる。中学 2 年生でも 4 月から 7 月までで 8 万語を読んだ生徒もいる。中学 2 年生が読める Starter レベルの洋書は 300 語から 800 語程度のもので多いため、約 200 冊の洋書を読んでいる。また、Level1 の洋書は 1,000 語から 2,500 語のもので多く、長期休み中に 1 万語の課題が出されるということは、一度に 4 冊程度は読むことになる。

ここでは、生徒の読書ニーズ把握のために、生徒が実際にどのような洋書を手に行っているのかについて分析を行う。

##### 4.1 図書館統計データおよび日常行動の分析

表 1 は、洋書がデータ化された 2009 年から 2012 年 8 月末までに、中学生が借りた洋書の貸出回数トップ 20 を抽出したものである。同点があるため、20 タイトル以上の図書が抽出されている。

まず目につくのは、Curious George シリーズの多さである。トップ 20 に含まれる Curious George シリーズを合計すると、114 回の貸出回数がある。導入初期から現在にいたるまで、不動の人気を誇っている。Curious George シリーズは実際にはそれほど簡単な英語ではないのだが、図書館で借りている生徒の様子を見ると、「これ知ってる！」という声が多く、「日本語で読んだことがある」ことを理由に借りている生徒が多いように感じられる。Frog and Toad のシリーズや、*Jack and the Beanstalk*、*Rumpelstiltskin* のようなよく知られた童話が読まれることも、やはり「日本語で読んだことがある」ことの影響であろう。また、*The Gingerbread Man*、

Clifford シリーズのように、実際には日本語で絵本を読んだことはなくても、キャラクターを知っているというだけで、よく手に取られる本もある。中学生が読むレベルの図書には、ORT のように日本語訳されていないものも多いため、「日本語で読んだことがある」本ばかりを読み続けるわけにはいかない状況の中、少しでも読みやすい印象を受ける洋書を選ぶ生徒の姿が目につくようにも思われる。

4.1 表1 中学生貸出トップ20

順位	回数	書名	著者名 1	出版者
1位	29回	Frog and Toad Are Friends	Lobel, Arnold	Random House
2位	25回	Gingerbread Man, The	Arengo, Sue	Oxford Classic Tales
3位	22回	Little Red Riding Hood	Arengo, Sue	Oxford Classic Tales
4位	19回	Curious George Takes A Train	Ray, H. A.	Houghton Mifflin
5位	17回	Jack and the Beanstalk	Arengo, Sue	Oxford Classic Tales
5位	17回	Little Miss Sunshine	Hargreaves, Roger	Price Stern Sloan
5位	17回	Days With Frog and Toad	Lobel, Arnold	Random House
5位	17回	Rumpelstiltskin	Arengo, Sue	Oxford Classic Tales
9位	16回	Goldilocks and the Three Bears	Arengo, Sue	Oxford Classic Tales
9位	16回	Curious George's First Day of School	Ray, H. A.	Houghton Mifflin
11位	15回	Princess and the Pea, The	Arengo, Sue	Oxford Classic Tales
12位	14回	Curious George Goes to an Ice Cream Shop	Ray, H. A.	Houghton Mifflin
12位	14回	Town Mouse and the Country Mouse, The	Arengo, Sue	Oxford Classic Tales
12位	14回	Clifford Visits the Hospital	Bridwell, Norman	Scholastic
12位	14回	Mr. Small	Hargreaves, Roger	Price Stern Sloan
12位	14回	Mr. Good	Hargreaves, Roger	Price Stern Sloan
17位	13回	Curious George Goes to a Costume Party	Ray, H. A.	Houghton Mifflin
17位	13回	Curious George Goes to a Chocolate Factory	Ray, H. A.	Houghton Mifflin
17位	13回	Curious George Visits a Toy Store	Ray, H. A.	Houghton Mifflin
17位	13回	Curious George and the Pizza	Ray, H. A.	Houghton Mifflin
17位	13回	Survival Adventure	Hunt, Roderick	Oxford Reading Tree
17位	13回	Kidnappers, The	Hunt, Roderick	Oxford Reading Tree
17位	13回	Curious George and the Birthday Surprise	Ray, H. A.	Houghton Mifflin
17位	13回	Flying Carpet, The	Hunt, Roderick	Oxford Reading Tree
17位	13回	Boys vs. Girls	Waring, Rob	Thomson Foundations

4.1 表2 高校生貸出トップ20

順位	回数	書名	著者名 1	出版者
1位	72回	Phantom of the Opera, The	Bassett, Jennifer	Oxford Bookworms
1位	66回	Love Story	Border, Rosemary	Oxford Bookworms
3位	41回	Justice	Vicary, Tim	Oxford Bookworms
4位	37回	Chemical Secret	Vicary, Tim	Oxford Bookworms
4位	37回	Wizard of Oz, The	Baum, Frank. L	Oxford Bookworms
5位	33回	Chicken Soup for the Soul	Canfield, Jack	Kinseido
6位	31回	Elmer and the Dragon	Gannett, Ruth Stiles	Randomhouse
7位	29回	Christmas Carol, A	West, Clare	Oxford Bookworms
8位	28回	Elephant Man, The	Vicary, Tim	Oxford Bookworms
8位	28回	Charlie and the Chocolate Factory	Dahl, Roald	Puffin
10位	27回	Food and Drink in Britain	Maguire, Jackie	Oxford Factfiles
10位	27回	Happy Man and Other Stories, The	Yasunaga, Yoshio	Kinseido
12位	26回	George's Marvelous Medicine	Dahl, Roald	Puffin
13位	25回	Information Technology	Davies, Paul A	Oxford Factfiles
15位	24回	Cinema, the	Escott, John	Oxford Factfiles
15位	24回	Dragons of BlueLand, The	Gannett, Ruth Stiles	Random House
15位	24回	Martin Luther King	McLean, Alan C	Oxford Bookworms
18位	23回	My Father's Dragon	Gannett, Ruth Stiles	Randomhouse
18位	23回	Alice in Wonderland	Carroll, Lewis	Penguin Readers
20位	22回	Dead Man's Island	Escott, John	Oxford Bookworms
20位	22回	Coldest Place on Earth, The	Vicary, Tim	Oxford Bookworms

表2は、同じく2007年から2012年8月末までに、高校生が借りた洋書の貸出回数トップ20を抽出したものである。

突出して貸出回数の多い *The Phantom of the Opera* (72回)、*Love Story* (66回) は、映画原作ということに加えて、英語多読開始当初の高校英語担当教員が勧めたため、口コミでその読みやすさが広まっていった結果のように感じられる。同じく口コミで広まったものとしては5位の *Chicken Soup for the Soul* (33回) や、上位20位には入らなかったが、50位内には入っている *Life on the Refrigerator Door* (17回) がある。先行研究においては、教員や他者の推薦は大きな選択要因にならないとするものと<sup>22)</sup>、友人の口コミは選択要因にならないが、図書館員や専門家の推薦は選択要因となるという報告があったが<sup>23)</sup>、現時点の本校においては、教員、友人問わず、口コミの威力は大きいように感じられる。高校生も中学生と同じように「日本語で

読んだことがある」ほか、映画やドラマ原作などのために「なんとなくストーリーを知っている」本がよく選ばれる傾向にもあるように思われる。*The Wizard of Oz*、*Elmer and the Dragon*、*A Christmas Carol*、*The Elephant Man* などの人気はそのためであろう。教員や生徒同士の口コミが広まるのも、勧めてくれる相手が手掛かりとなるあらすじを話してくれているため、取り掛かりやすいのだと推測される。図書館内では、このように少しでも親しみやすいと感じられる洋書を選択しようとする姿がよく見られる。ただし、ORT に関しては、「幼児から大人まで楽しめる内容ではあるが、易しい英文で書かれた文字の少ない本の中には高校生が読む上で内容的に興味を持ちにくいものがある」<sup>22)</sup> ためか、中学時代に英語多読を開始した本校の高校生、特に高校2年生以上の生徒には、ほとんど手に取られないものとなっている。

そのため、「何かおもしろい本ありませんか」という生徒に、*Nate the Great* や *Wayside school* などのシリーズを、あらすじやおもしろさのポイントなどを加えて勧めると、試しに読んでみるといって手にする生徒が多い。また、教科書に掲載されていた O. Henry を探しに来る生徒もいる。しかし一方、高校生では *Food and Drink in Britain*、*Information Technology*、*Martin Luther King* (いずれも *Oxford Bookworms*) といった、いわゆる文化紹介的なものや伝記、ノンフィクションも読まれていることが特徴的である。このリストには入っていないが、男子には *Grosset & Dunlap* 社の *Who was.....?* シリーズや、*DK Publishing* 社の *Biography* なども人気である。本校は和書においても経済や法律の図書を読む生徒が多いため、高校生では「読みやすそうな経済関係の洋書」や「アメリカの陪審員制度について」「スティーブ・ジョブズの伝記」などの洋書を求めてくる生徒も複数いる。「物語」以外の洋書を所蔵する必要性を強く感じる。

## 4.2 アンケート分析

アンケート調査は2012年3月7日、8日の2日間実施した。時間は15分程度、各学年2クラス、記名方式で、図書館においてどのように図書を選択しているのかということについて質問した。質問項目は自由記述も含む12項目、うち2問は学年や性別を問うものである。回答数は中学2年生65名、3年生69名、高校1年生72名、2年生77名、3年生88名の計371名である。

今回はその中でも、特徴的だった数問について分析を行う。

4.2 表1 洋書を選ぶとき、何を基準にしているか。各項目についてどれだけ重視しているのか<sup>25)</sup>

	大変重視 している	やや重視 している	あまり重 視してい ない	重視して いない	無回答	計
語数	130	165	42	17	15	369
	35%	45%	11%	5%	4%	100%
レベル	134	142	63	16	15	370
	36%	38%	17%	4%	4%	100%
シリーズ（出版社）	27	65	115	146	16	369
	7%	18%	31%	40%	4%	100%
イラスト、挿絵が入っている	87	141	87	41	15	371
	23%	38%	23%	11%	4%	100%
イラスト、挿絵が入っていない	31	53	134	134	16	368
	8%	14%	36%	36%	4%	100%
あらすじを知っている	58	93	126	79	15	371
	16%	25%	34%	21%	4%	100%
日本語で読んだことがある	47	93	127	89	15	371
	13%	25%	34%	24%	4%	100%
なんとなく直感	138	149	43	22	19	371
	37%	40%	12%	6%	5%	100%

## 1) 語数、レベル

「語数」を重視していると答えた生徒は「大変重視している」「やや重視している」あわせて295人（80%）、「レベル」を重視していると答えた生徒は、「大変重視している」「やや重視している」あわせて276人（74%）。生徒たちが「語数」や「レベル」をかなり重視していることがわかる。事実、特に英語多読の実施当初は、図書館では語数合わせのために23語、40語といった洋書を必死になって探す生徒の姿もよく見受けられた。現在でも、一部の生徒にその傾向は残っている。自分のレベルに合う洋書を選択するために貼付した「語数」「レベル」を示す色付きテープ（テプラテープ）だが、課題の語数合わせをするためのツールとして使われている。生徒たちが自然に自分のレベルを把握し、1,000語の洋書も1,200語の洋書も同じように抵抗なく受け入れていくように仕向けるためには、同じ課題でも、その提示方法に工夫が必要になってくるだろう。また、先行研究には学習者が「易しいものをたくさん読む」ことでは満足できなかったり、プライドから難しい本を読む傾向にあることを指摘したものもある<sup>26)</sup>。生徒のプライドを傷つけぬよう、なおかつ易しい本であろうと難しい本であろうと、レベルや語数をあまり気にせずに継続的にたくさん読ませていくためには、さまざまな角度から課題の提



示方法を検討することが必要だろう。

例えば「1日100語程度を目標とする。1000語に達したら Book report を出す」「語数や Level に応じてポイント制にし、Level は低くても語数の多いものを読むか、語数が少なくても Level が高いものであれば同じポイントになる」などの方法が考えられる。

## 2) 出版社、シリーズ

シリーズ、出版社を気にすると答えた生徒は「大変重視している」「やや重視している」あわせて92人(25%)とそれほど多くない。しかし、4か月間で8万語を読んだ中学2年生は、「最初はORTを読んでいただけ、そのうち茶色の難しいの(Stage8以上)になっちゃって、それは無理だから、今度は違うの(I can Read! や Classic Tales など)を順番にぜんぶ読んでみて……」と、出版社を気にしている。これは、釣井氏らが関西の私大で行った研究結果にあるように、出版社の制覇、あるいは重複して読むことの防止<sup>27)</sup>の意味があるようである。

海外では、中学生になるとシリーズものはそれほど選択しないという報告があるが<sup>28)</sup>、これを限定された出版社、シリーズの洋書を多く所蔵している日本の学校図書館で比較することは難しい。生徒たちは出版社を気にせず読んでいると答えているが、実際には蔵書がシリーズを中心に構成されているため、4.1の表1、2にあったように、貸出上位洋書には同じ出版社やシリーズのものが集中してしまうからである。本校でいえばLevel3、4には1冊読み切りの小説などが増えてくるため、今後、それらの洋書を読む生徒の選択行動について調査する必要がある。また、Starter や Level1、2程度でシリーズものではない洋書を揃えていく必要もあるだろう。

## 3) イラスト

「イラスト、挿絵が入っている」ことを重視していると答えた生徒は「大変重視している」「やや重視している」あわせて228人(61%)、「イラスト、挿絵がない」ことを重視している生徒は「大変重視している」「やや重視している」あわせて84人(22%)である。英語多読が軌道に乗り始めた当初、生徒から「イラストが多いものは電車の中で読むことに抵抗がある」という意見があった。しかし、今回の調査では半数以上がイラストのあるものを選んでおり、「ない」ことを重視する生徒はそれほどいないという結果となった。

中高別に見てみると中学生は「イラスト、挿絵が入っている」ことを「大変重視している」「やや重視している」あわせて96人(71.7%)、「イラスト、挿絵がない」ことを重視している生徒は39人(29.1%)である。対して高校生は「イラスト、挿絵が入っている」ことを「大変重視している」「やや重視している」あわせて132人(55.7%)、「イラスト、挿絵がない」ことを重視している生徒は45人(19.0%)である。学年が上になるにつれて、イラスト、挿絵の重要度

は低くなるようである。

#### 4) あらすじ等

「あらすじを知っている」ことを重視していると答えた生徒は「大変重視している」「やや重視している」あわせて151人(41%)、「日本語で読んだことがある」ことを重視している生徒は140人(38%)とほぼ似たような結果となっている。約60%の生徒が、あらかじめ知っている洋書を好んで選ぶわけではないことがわかった。中高別で分析してみても、中学生と高校生に大きな差異はない。また、男女間にも大きな違いは見られなかった。

4.1で述べたように、図書館統計データおよび日常の行動からは、「日本語で読んだことがある」洋書を選ぶ傾向にあるように思われたが、生徒の意識とは異なるようである。ただし、和書においては、読書量の多い生徒は「自分の好きな著者やシリーズ」を、読書量が少ない生徒は「ベストセラーや映画になった『話題の本』など」を選択する傾向にあるという分析もあるため<sup>29)</sup>、今後は生徒の読書量とも関連させて調査する必要がある。

#### 5) 直感

「なんとなく直感」を重視していると答えた生徒は「大変重視している」「やや重視している」あわせて287人(77%)。生徒によれば、「(レベル別に配架されているので)目的とするレベルの棚に行き、適当に本を手にとって、イラストを見たりパラパラとページをめくってみたりして、良さそうだと思ったら借りる」「表紙が気に入ったもの」とのことだった。その際には出版社、シリーズ、作者を選択の基準にはしていないとも述べていた。

Maynard; Mackay; Smythの報告では中高生の19.1%がthe title sounds interestingという理由で選んでいる<sup>30)</sup>。またyou like the appearance / design of the coverは11.3%、併せて30.4%の生徒が「何となく」選んでいる。Daliも移民の図書選択基準にcatchy book coversが頻繁に出てくることを報告している<sup>31)</sup>。評判や内容を確認して選ぶのではなく、表紙などの本の雰囲気から「直感」で選ぶことは、国内外を問わず共通しているようである。

### 5. 今後の収書方針

第1章で述べたように、本校が本格的な英語多読を開始して4年目となる。中高生にとっての英語多読は、純粋に「読書を楽しむ」ためというよりも、強制された授業課題のために決められた期間に決められた語数やレベルを「こなさなければならない」という側面が大きい。ただし現状では、英語多読に対して苦痛で仕方がないという反応を示す生徒は少なく、むしろ「面白かった」「力になった」という感想の方が多い。この気持ちを継続させるためには、生徒た

ちの興味・関心に沿った多読用洋書を取書していく必要がある。

しかし、1.3で述べたように、現状では生徒が自分の好きな本を自由に選択できると感じて満足できるような蔵書構成になっているわけではない。その理由としては、3.2で述べたように、選書ツールの貧弱さ、購入方法の煩雑さなどが挙げられる。

4.1の図書館統計データおよび日常行動から見えたように、「日本語で読んだことがある」洋書を好んだり、映像化された本、話題の本を好む生徒の存在は見逃せない。加えて、4.2で述べたとおり、アンケート調査の結果から、生徒たちは「語数」「レベル」を重視しているが、「表紙」などから受けるイメージ、「直感」で選ぶことも多いことがわかった。英語科教諭に課題提示方法を工夫してもらう一方で、今後も需要の大きい Level1、2程度、語数2,000語から3,000語程度で日本国内でも人気のある図書の原書や映画原作などを積極的に選書していく必要もある。英語多読の実践が増加している現在、選書に対して積極的にサポートする姿勢を見せている書店もある。今後はそのような書店と連携して多読用洋書の収集をしていくことも重要だろう。

生徒は英語多読に慣れてくると、GRやLRだけでは物足りなくなってくる。現在GR以外の人気洋書はNate the Great、Curious George、Roald Dahl、Magic Tree House、Mr. Men & Little Miss、Corgi Pups、Who was.....?、Elmer and the Dragon、Frog and Toadなどのシリーズである。また、ある程度英語多読に慣れてきて、少し難しいものに挑戦しようとする生徒たちはDarren ShanやGossip Girlsシリーズなどを読むこともある。ただし、多くの生徒は、GRやLRでは物足りないが、例えば*The Borrowers*（邦題【床下の小人たち】）、*Howl's Moving Castle*（邦題【魔法使いハウルと火の悪魔】）などLevel4の洋書は、日本語で読み、映画を楽しんではいても、それを英語で読むまでの気力はないと口にする。2万語を超える洋書にはなかなか手が出ない。しかし、Harry Potterシリーズに関しては、興味があるが厚過ぎて手が出ないという生徒がいる一方、日本語で暗記するほど読んでいるような、いわゆるハリポタファンであれば、躊躇なく手にして「ちゃんと読めた」ということがある。能力的には、Level4を読むことのできる生徒も多く存在するし、長編を読むだけの根気や力量をもった生徒も多い。これらの生徒をどのように導いていくかも、今後の課題となっていくことと思われる。

なお、現在も図書館内では和書と原書を並べるなどの企画展示を実施しているが、今後はさらに、短編集、学園もの、友情もの、アドベンチャー、動物が主人公などといった内容にあわせた企画展示などができると、より生徒の満足感につながっていくと考えられる。

## おわりに

英語科と学校図書館との連携によって、生徒が和書と同じように自然に洋書を手取る環境

が根付いてきた。移転後、探究型学習に対応できる学校図書館にするための選書を心がけていた司書教諭にとって、洋書やブックトラックの購入費までを図書館予算から捻出することになっていたとしたら、ここまで英語多読を支援できたかは不明である。英語科が政策経費を得ることができたことは、非常にありがたいことであった。

多読用洋書の購入を主に担当した英語科教諭と、洋書の選定に関してサイト等を紹介した司書教諭は、それぞれに長期の在外経験があり、北米の小・中・高等学校図書館、公共図書館、書店等の利用経験がある。そのため、本校が所蔵する洋書が特定の出版社が提供する読みものやシリーズに偏っていることについての懸念は常に抱いている。海外の書店で直接図書を選定、購入した経験を持っていると、現在の選定ツールの貧しさ、ネット購入の煩雑さにはもどかしさを感じることも多々ある。書店や取次が英語科や図書館と協力して選択ツールを充実させることも必要であるが、今後、本校が本格的な国際化を視野に入れ、英語多読に力を入れていくのであれば、英語科だけではなく複数教科の教員とともに海外の書店に出かけ、生徒が興味を持つ分野、内容にあった図書を直接購入することも必要となってくると思われる。

英語多読に関しては、英語教育の観点から考えて、SSS 英語学習法研究会が推奨する「辞書は引かない」「わからないところはとばす」「つまらなければやめる」の三原則が本当に正しいものなのかを検討する必要もある。継続的な英語多読に導くための手法、課題の提示方法、和書の読書量減少との兼ね合いなども、今後の課題として検討していきたい。

最後に、調査にあたっては多忙な答案指導日の最中、多くの英語科の先生方、生徒たちにご協力いただきました。感謝申し上げます。

---

参照文献・注

- 1) SSS 英語語多読研究会. めざせ 100 万語! 多読で学ぶ SSS 英語学習法. <http://www.seg.co.jp/sss/>, (参照 2012-05-05).
- 2) レベルは英語科が決定した Starter から Level4 までの 5 段階で、本校生徒の学習レベルに合うよう、SSS 英語学習法研究会のものよりも幅を持たせたものである。Oxford Bookworms のレベルを土台として、Starter は絵本をはじめ、やさしい絵や写真の多いもの。英検 4 級まで。Level1 は過去形や完了形などさまざまな動詞の時制が含まれるもの。1 万語を超えるものもある。英検 3 級程度。Level2 は中 3 から高 1 で習う文法が含まれるもの。推理、ロマンス、ノンフィクション、伝記などさまざまなジャンルがある。英検準 2 級程度。Level3 は学習用に書き換えられた本が中心だが、かなり読み応えのある量・質のもの。英検 2 級程度。Level4 はやさしい英語に書き換えられていない、オリジナルなままのもの。2 級以上。
- 3) Shared Reading とは、教師など読書経験豊富な者が子どもたちとビッグブックや拡大された本を使用し、生徒とやりとりをしながら読む活動である。1979 年に Holdaway によりその方法が紹介されてから英米で広がった指導法。Shared Reading. Pacific Resources for Education and Learning: Enhancing community well-being through partnerships in education. <http://www.prel.org/toolkit/pdf/teach/Shared%20Reading.pdf>, (参照 2012-09-12).
- 4) ブックスタートとは、1992 年イギリスで始まった運動である。図書館、保健所、大学が連携して行われ、具体的には、保健所での生後 7～9 カ月検診参加者に、図書館員が赤ちゃん向けの絵本 2 冊と親向けイラストアドバイス集、図書館登録カード、育児情報などがセットされた「ブックスタートパック」をプレゼントする。日本では 2000 年に東京都杉並区でパイロットスタディの形で開始され徐々に全国に広まりつつある。この運動の理念は保護者の活字離れ、育児不安、親子関係の希薄化などの社会問題に対して地域行政が子育て支援するのが目的となっている。(図書館用語辞典編集委員会「最新 図書館用語大辞典」2004 年、4 月、xiv、643p.)
- 5) タイトル、著者名、出版社名、レベル、語数、コメント(日本語で書くか英語で書くかは担当教諭が決める)を書く用紙。A4 用紙 1 枚につき 5 冊の洋書について書くことになっている。
- 6) 桑田てるみ「生徒の読書材選択行動および選択要因の特徴: 有効な読書案内に向けての考察」、『三田図書館・情報学会研究大会発表論文集』2006 年度、p.73-76.
- 7) 佐藤大介、橋内幸子「中学校での多読指導実践が及ぼす影響に関する一考察」、『中国学園紀要』no.5、2006 年 6 月、p.75-81.
- 8) Akio Yamamoto. *Is a One-Year Extensive Reading Class Enough?*. 『言語文化社会』no.9、2011 年 3 月、p.143-152.
- 9) 釣井千恵、ハーバート久代、山科美和子「多読指導における学習者評価法としての要約課題に関する質的研究: 多読に成功した学習者の体験分析から」『国際学研究』no.1、2012 年 3 月、p.97-110.
- 10) Maynard, S., Mackay, S., Smyth, F. (2008) 'A survey of young people's reading in England: Borrowing and choosing books', *Journal of Librarianship and Information Science*, 40 (4) December, 239-253.
- 11) Dali, K. (2012) 'Reading their way through immigration: The leisure reading practices of Russian-speaking immigrants in Canada', *Library & Information Science Research* 34, 197-211.
- 12) P-H Sheu, S. (2004) 'The Effects of Extensive Reading on Learners' Reading Ability Development', *Journal of National Taipei Teachers College*, Vol. 17, No.2, 213-228.
- 13) Graded Readers 専門 SEG Bookshop on the WEB. <http://www.seg.co.jp/bookshop/index.html/>, (参照 2102-09-15).
- 14) 全国学校図書館協議会. "全国学校図書館協議会図書選定基準". 全国学校図書館協議会. <http://www.j-sla.or.jp/material/kijun/post-34.html>, (参照 2012-09-01).
- 15) 文部科学省. "中学校学習指導要領解説: 外国語編". 文部科学省ホームページ. [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/fieldfile/2011/01/05/1234912\\_010\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf), (参照 2012-08-29).
- 16) 星佐都子「英語教育に対応した資料収集」『学校図書館』no.739、2012 年 5 月、p.34-35.

- 
- 17) 米澤久美子「英語多読と学校図書館」『学校図書館』no.739、2012年5月、p.31-33.
  - 18) Young Adult Library Services Association.<http://www.ala.org/yalsa/>, (参照 2012-09-7) .
  - 19) Teachers first. <http://www.teachersfirst.com/100books.cfm>, (参照 2012-09-7) .
  - 20) Barnes & Noble.<http://www.barnesandnoble.com/>, (参照 2012-09-7) .
  - 21) Los Angeles Public Library Teen Web. <http://www.lapl.org/ya/index.html>, (参照 2012-09-7) .
  - 22) 同 6)、同 10)
  - 23) 同 11)
  - 24) 山本昭夫「英語多読における学習者の選書傾向：高校生の英語の選書傾向をたどる」『日本教育心理学会総会発表論文集』no.52、2010年7月、p.602.
  - 25) 多重回答エラーのため、総回答者数に差異が生じている場合がある。
  - 26) 同 8)
  - 27) 同 9)
  - 28) 同 10)
  - 29) 同 6)
  - 30) 同 10)
  - 31) 同 11)